

上田市立西内小学校



(1) 学級数 7クラス

(2) 児童数 男子39名 女子34名 計73名

(3) 職員数 16名

(4) 学校紹介

<http://www.school.umic.jp/nishiuchi/>

本校の学区は、旧丸子町の西部にあり、西・南・北の三方を連峰に囲まれた谷間に、帯状に東西に細長く展開している。松本市との境の三才山峠に源を発し、東に流下する内村川と支流の霊泉寺川に沿って、農村型集落と耕地が分布している。

本校は、明治7年に開設された彝倫（いりん）学校と研性（けんせい）学校の4年後（明治11年）の統合が起りであり、明治28年に現在地に校舎ができた。以後何度かの改築、改修を経て現在に至っている。

本校の学校目標は、

- (1) 知 恵・・・たしかな学力を身につける。
- (2) ね ば り・・・ねばり強い心やからだをつくる。
- (3) 思いやり・・・ゆたかな心を育てる。

であり、その具現のために、さまざまな教育活動を展開している。

特色のあるものとしては、耕地内に作られている「登り窯」による全校焼き物づくりや、5・6年生全員参加によ

る金管バンド演奏活動が挙げられる。また、小規模校の良さを生かした「なかよし班」編成による全校縦割り活動がさかんに行われ、全校が「家族」のような雰囲気で行なっている。

(5) 大会テーマの受けとめと研究のねらい

本校では、

○ねばり強く追究していく子ども

○地域の自然や人（社会）と深くかかわれる子ども

の姿を願って、全校研究テーマを「子どもたちが人やことに深く関わりを持ちながら、主体的に学習活動を進めていくための指導はどうあったらよいか」とした。人やことに深く関わりを持つということは、視放研テーマで掲げている「広い視野を持ち新しい文化を築く」ということにおいて大変重要な事柄といえる。

本校は「音楽」の公開授業校となっているが、全校研究テーマを受けて、「ひとりひとりが心に感じた音楽を生き生きと表現するための支援はどうあったらよいか」を教科研究テーマに据えた。そして、

①歌唱であっても器楽であっても、心に感じた音楽をのびのびと表現できる。

②音楽に浸って、小さな感動を積み重ねながら、もっともっと音楽を好きになる。

という子どもの姿を思い描いている。

①では、VTRを用いて自分（自分たち）の課題をつかんだり、変容を確認したりすることが、視聴覚機器の有効利用の一つではないかと考えている。②では、本物を観せたり聴かせたりする機会を数多くとりたい。その一つとして、DVDによるミュージカル観劇の疑似体験を考えた。ミュージカルは歌・ダンス・演劇の総合芸術であり、表現の究極の世界ともいえる。そのダイナミックな表現力に、子どもたちは魅了され、夢中になって劇を観るだろうし、憧れやめざす姿も生まれ、歌う意欲へとつながっていくのではないだろうか。このことが研究の一つの仮説である。



（６）日常的な活用

○ネットワーク環境

本校は、校内LANが整備済みであり、どこからでも接続可能になっている。

○パソコンの活用

本校のパソコン室には、デスクトップ型パソコンが21台設置されており、インクジェットプリンター3台、カラーレーザープリンター1台、スキャナ1台が配備されている。

小規模校で、児童数の一番多い学年でも20名ということで、完全に一人一台のパソコンを占有して学習ができる。また、単純に割り振っても各学年が1週間にパソコン室を使える時間数は4～5時間となり、ほぼ毎日の使用が可能である。児童や教師が必要と感じた時に、いつでもパソコンを使った学習ができるのが、小規模校なるが故のメリットといえる。

○プロジェクターの活用

現在プロジェクターは3台あり、教室の授業においては、スマートボードや可搬式のスクリーンと組み合わせて活用し、学習効率を高めている。また、体育館での活用として、集会活動において、写真や資料の提示に用いたり、行事参加者に向けての案内（プログラムの表示や歌の歌詞の提示など）に頻繁に用いている。

パソコンと同じく、こちらも小規模校のメリットとして、

使いたいときに使え、画面もよく見えるので、大変役に立っている。

（７）研究を推進してきたの現時点での課題

音楽科研究グループでは、子どもたちが音楽に心を揺り動かされてその魅力に感動を覚えるための手だてとして、DVDによるミュージカル観劇の疑似体験活動を仕組んでみた。

3年生において、劇団四季のミュージカル『魔法をすてたマジョリン』の中で歌われている『心から心へ』を教材化し、曲の気分を感じ取って歌えることを目標とした。本題材ではまず、『心から心へ』の範唱を聞かせ、旋律や歌詞から伝わってくる曲への思いを膨らませることからはじめた。その後、ミュージカルのDVDをプロジェクターによって観せ、歌うことへの憧れを持たせたり、歌い方の参考にさせたりすることを試みた。

音楽における「鑑賞」と「表現」は、それぞれ単独で扱われることが多いが、今回のように、鑑賞と表現を結びつけたり組み合わせたりすることのよさが分かってきた。ただ、題材の流れの中でどのように鑑賞をさせることが、音楽でつきたい力の育成に有効なのかは、今後深く吟味する必要がある。ミュージカルを取り上げる場合、鑑賞としてまず扱って、表現では短い時間にポイントを観せるというやり方も考えられるだろう。

秋の大会に向けて、DVDを活用した取り組みをさらに研究していきたいと考えている。

